中国の伝統文化をめぐる状況と見解（二）

―文化の伝承と生涯学習に関する基本的概念と事例について―

張　妙弟　　張　帆
宋　　佳　訳
（日本語校閲：渡邊洋子）

Current Status and Some Opinions on Chinese Traditional Culture

Zhang Miaodi　Zhang Fan
Song Jia (trans.)
WATANABE Yoko（Japanese reviser）

初めに

本論は、「伝承・習い事」文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究の一部である。同研究は、京都大学の渡邊洋子先生が中心となり、日本学術振興科学研究費の支援を受けて実現したもので、テーマは「『伝承・習い事』文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究」である。

そこでの基本的なキーワードは、伝承文化、習い事文化、文化伝承、生涯学習である。地理的・歴史的条件から、日中韓の三国の文化には、共通する特徴や類似した特徴が多く存在する。その一方で、人類の発展にともなって、文化は絶えず変化しつつある。それゆえに、文化は、民族性、国家性、地方性を有するのである。日中韓の各々の文化には、様々な相違点もある。本研究においては、前記のようなキーワードについて日中韓の各学界で、独自の理解がなされている。各々の具体的な状況について、学術交流をもとに比較研究を始める前に、研究に関わる基本的な概念を整理する必要がある。本論で中国の実例を紹介しながら、筆者の私見を述べる。

一．いくつかの事例

１．淮陽伏羲の崇拝[1)]

淮陽は河南省周口地域にある県であるが、現在、淮陽を知っている人はそれほど多くない。実は、中国の歴史において、淮陽は偉大な場所であった。中国の歴史において淮陽は「祖父の祖父にあたる場所である」と中国の有名な文化学者舒乙氏は言った。これは、淮陽に伏羲墓、すなわち太昊陵があるためである。伝説によると、中国の歴史の天地開闢の時期に「三皇五帝」（約6500年前）と呼ばれる時期がある。伏羲とは「三皇五帝」のうち、最初に即位した人物と思われる。伏羲の墓が淮陽にあり、漢朝ではなく淮陽で伏羲を祭祀したとの記録が見つかった

ことからすれば、、今まで伏羲を祀ってきた歴史は、もはや約2000年にのぼると言える。

ここで言いたいのは、祖先である伏羲への崇拝が今でも「熱狂」と言っても過言ではないことである。旧暦の毎月1日と5日は伏羲を祀る日であり、当日この祭祀のために訪れる人々の数は、１日二万人程で、人々が広大な広場をぎっしりと埋め尽くすのである。また、旧暦の2月2日から3月3日までの１ヶ月間で、参詣者は毎日4万人程度にまで達する。祭祀が終わると、燃えた線香の灰がトラックで何台も運ばれるという。

ここで強調したいのは、このような祭祀活動が完全に人々の自発的な行動であるという点である。参加者たちは伏羲を神と見なし、河南省、安徽省、山東省、河北省、湖北省など、農村部からやって来る。平安、子孫、幸福などを祈るために、敬虔に列を作って伏羲の墓の前で拝礼し線香をあげて願う。

「これは世代間の継承と言えるだろう。これは歴史そのものであろう。これは伝統であろう。一見、無形な力のようだが、目で捉えることができ、触れることもできる。この力には重みがあり、巨大な力を持ち、人々を震撼させる。実にすばらしいものである。」(舒乙)

文化大革命の時には、伏羲の墓地が大きなダメージを受けた。東の院と西の院が全部潰されてしまい、真中の一部しか残っていなかった。現在では、短期間で復元されるようになっており、墓の前の広場はすでに完成している。

人間が子孫を増やしていく自然の摂理が、伏羲の崇拝が根強いもう一つの理由である。太昊陵宮殿の東北の方角には、礎石がある。そこにはピンポン球のような穴があり、それは女性の性器を象徴している。女性がその穴に触れると子どもを授かると言われている。祭日になると、そこは最高に混雑する。太昊陵の前には、粘土でできた犬が売られている。これは淮陽の名産品である。それらの犬の多くは、可愛い外見を持つ一方で性を暗示している。以上のことから、中国の農民にとって、子どもを生むことが何よりも重要だということが見てとれる。このような事実は、太古以来の性への崇拝が今日でも現れているという点で、私たちがそのような遺伝子をもっているのだと言われる所以でもある。

２．蔚県上蘇庄村「拝燈山」[2)]の事例

蔚県は河北省張家口市に属し、太行山の北、河北省と山西省の境界に位置する。かつては蔚州と呼ばれ、長い歴史と豊かな文化遺産がある。そのうち、上蘇庄村の拝燈山は民俗社火活動[3)]の一つである。拝燈山は、明朝の嘉靖期に起源をもつものであり、その後、紆余曲折を経て、現在は、中国の非物質文化遺産に登録されている。

拝燈山の民俗社火活動の基本的な内容は、①燈山をともす、②燈山を拝む、③社火と触れ合う、④大衆芝居の4つから構成されている。上蘇庄村では毎年、旧暦の1月14四、15、16日に、拝燈山が行われる。上蘇庄村とは古城の一つであり、450年程前の城壁、城門及び多くの民居が遺されている。古城自体も民俗文化の一つである。古城は、村の先人たちが戦乱を避け、国を守る精神と知恵を表している。

拝燈山活動の核となる活動は火の神様を祭祀するものである。明朝嘉靖二十二年、村の繁栄をもたらす事を願い、城が建てられた。「土が火から生まれる」という古い言い伝えから、城

の南には火の神様を祭る燈山楼が建てられた。一方、火の神様が力を持ちすぎる恐れがあったため、城の北には劉備、関羽、張飛を祭る三義廟が建てられた。これは劉備が水の星だという伝説に基づいている。こうして水と火の平衡が保たれた。そしてこの頃より、火の神様を祭り、祭壇を立て「三義」を供えることが村で最も重要な民俗儀式になり、代々伝えられている。城の南にある燈山楼は高さ約三丈程（約10メートル）で、厨子には神像はなく、巨大な梯子式の棚のみが置かれている。その棚には、拝燈山の際に燈碗を置くための桁が多数渡されている。通常は、そこに燈碗は置かれず、ただ一つ大きな棚があるだけだが、それでも村民たちはその大きな棚を神のように見なしている。

何百年の間、伝えられてきた民俗として、拝燈山に様々なしきたりとルールがある。例えば、燈山楼の棚に置かれた燈碗は、何かの模様になるように並べられる。その中には、吉祥の意を表す文字もある。例えば「天下平和」「豊作」などがあり、その年の干支を反映した「X年大吉」などもある。祝福の言葉は人々を温かい気持ちにさせる。「燈官」（「郡奉行」とも呼ばれる）を演じるのは、必ず両親がまだ生きている男児とされている。城内の提灯は平年なら12個が掛けられ、閏年なら13個が掛けられる。それは月々の平安、気候の順調を意味する。家ごとに、玄関には自家製の彩色の燈が高い所に掛けてあり、その中には走馬灯（回り灯篭）もある。古城の姿が村の裏にある険しい峠に映って、幻のように見える。

数百個の燈碗が燈され、燈火が人々の目に映る。皆が歓喜の声をあげる中、民間芸人は大きな透明の幕をひき、中の棚を隠す。そこからこぼれる光は、ぼんやりとゆらゆらしていて美しい。

この時、燈官が先頭に立って「燈を拝もう」と声をあげ、村の人々とと観光客は敬虔な面持ちで火の神様を参拝する。その後は村人の自由参拝の時間になり、今後の出世のために、辻に立ててある高い燈の柱を子どもに高く登らせる親もいる。既婚の若い女性たちが参拝し終わった後、神様から子どもを授かるように（との願いから）、燈山楼に入り燈碗を六つ受け取って家へ持ち帰る。続いて大衆芝居である。化粧をした「登場人物」が踊ったり、遊んだりして、観客と一緒に喜びに浸る。神話によって伝わる「北の神」である玄武と玄武の妻も、演じられる。その後、爆竹が鳴らされ、伴奏音楽が流され、本番の伝統劇が始まる。多くの場合、演じられるのは晋劇の伝統演目である。（蔚県は晋劇が普及した地域の一つである。）

３．朱仙鎮木版年画[4]の事例

朱仙鎮は、河南省開封市の西南から22キロ離れたところに位置する。河南省の水陸要衝に位置し、中国の「四大名鎮」[5]の一つであった。

木版年画は、北宋朝に東京[6]開封で登場した。その背景となったのは、紙の普及と活版印刷の発明である。当時、発達した商工業は新興庶民階層の拡大を推進し、絵画が宮廷から庶民へ広まっていった。したがって、絵師と大工職人の手により共同で作られた年画――木版年画が登場した。文献史料によると、当時東京の木版年画はすでに盛んで、広く普及していたようである。有名な『清明上河図』にも、「王家紙馬」という店の絵が描かれている。靖康二年（紀元1127年）に、金兵が東京を攻め落とし、年画芸人は朱仙鎮に移った。そのことにより木版年

画は朱仙鎮で再び発展し、新しい産地の名が世間に知られるようになった。明朝と清朝の全盛期（朱仙鎮で年画の店は三百軒程あり、１年間作製された枚数は三百万枚以上だった）、清末から民国にかけての衰微な時期（残った年画工場は23軒のみで、同業組合も解散）及び1949年以降の紆余曲折の発展時期（共同組合が設立され、文革期のダメージと改革開放後の生まれ変わり）を経て、現在、朱仙鎮木版年画は中国の非物質文化遺産（民間美術類）に登録された。

朱仙鎮の木版年画の制作手順は、原稿作製、木版彫刻、印刷と年画干しというものである。その工芸が細かく複雑で、品質に非常にこだわっていると言われる。その題材は、初期の単なる魔除けをはじめ、祝福・吉祥、歴史物語、社会生活にわたり、幅広く豊富である。年画の題材は多数あるが、魔除けを題材とした作品の代表に、門神年画が挙げられる。それはしばしば対で作られ、決まった組み合わせがある。左側が神荼なら、右側は郁垒で、左扉が白い顔の秦琼なら、右扉は黒い顔の迟恭である。秦琼の隈取式門神は朱仙鎮により創られたと言った専門家もいる。「武の福神」である『燃燈道人、趙公明』と「文の福神」である『劉海戯金蟾』という門を守る神の年画も作製された。吉祥の意を含む代表作品には『天地全神』『三星門神』などがある。岳飛抗金[7]は歴史的に有名で、当時の朱仙鎮合戦の場であった。そのため岳飛に関する題材が多く、朱仙鎮木版年画の特徴の一つとなっている。朱仙鎮木版年画は、線は太く構図が豊かで、人物の姿が大げさな事に加え、色も鮮やかである。そこには中原地域の特徴がはっきりと表れている。中国民間文芸家協会主席である馮驥才は「中国年画は中国民間芸術の筆頭でありながら、河南朱仙鎮が中国年画歴史の発祥地である」と述べた。

４．昆劇『1699・桃花扇』[8)9)]の事例

昆曲の元の名称は、「昆山腔」あるいは「昆腔」という略語であった。清の時代より「昆曲」と呼ばれ、今は「昆劇」とも呼ばれている。昆劇は中国伝統戯曲の中で最古の劇の一つであり、「蘭の花」と呼ばれる。昆劇の起源は元の時代に遡り、600年程度の歴史がある。江蘇昆山付近で発祥し、万暦の末年[10]に北京へと伝えられていった。江蘇省の昆山周辺りに生まれ、浙江省生まれの海塩腔、余姚腔と江西省生まれの弋陽腔と同様、中国の南戯系統に属し、「明の四大曲」と呼ばれる。最初は昆山腔が民間の軽い曲を主とし、蘇州周辺りにしか流行していなかった。明の万暦になってから、長江の南方と銭塘江の北方各地に広まっていた。その後さらに広く普及し、万暦の末年には北京に入った。

17、18世紀の200年間に及ぶ昆劇ブームによって、中国全土で社会階層を問わず、昆劇ファンが生み出された。さらに昆劇は、中国戯曲世界の頂点に300年間も君臨しており、100種類以上の地方劇を生み出し発展させた。これらのことを経て、昆劇は「百戯の祖」という呼称に恥じないものとなった。有名な戯曲理論家兼作家である余秋雨は、「昆劇は中国伝統戯曲学の最高模範である」と称した。

昆劇の全盛期には毎年、中秋節になると、皆が曲を競いに虎丘へ駆けていくため、蘇州城の内外には誰もいなくなったと言われている。それが、当時の地域の生活風景になった。清朝末期から民国初期にかけて昆劇は消滅に瀕した。1949年以降、『十五貫』の登場で一時再ブームを起こしたが、しばらくすると再び低迷の一途を辿った。全国では「六つ半」の昆劇団しか残っ

ていなかった。そんな時期には、昆劇について「博物館の芸術」、「老人芸術」と呼ぶ人さえ現れた。改革開放で昆劇は新たな転機を迎えた。2001年にユネスコの「人類口承・非物質遺産」に登録された。近年、昆劇芸術の成果は留まることなく、多くの人材を輩出している。その中でも特に、2006年江蘇省演芸グループが『1699・桃花扇』を世に出し、強力な社会的反響を巻き起こした。昆劇の芸術性を保護するために、重要な経験が蓄積されたのである。

演目の名称にある『1699・桃花扇』は、原作者である清朝の孔尚任がシナリオを完成させた年である。「伝統を尊敬する」という思想の旗を揚げられたのは明らかである。その思想はシナリオ、音楽、分担、舞台など至る所で現れて、できるだけ当時の生活様式と感情を表しつくした。例えば、『桃花扇』の原本シナリオは44回分あり、昔は9日間連続上演であったが、今はそれは不可能だということである。原作の精神と雰囲気を残すという前提の下、原作の内容の削減以外には新編や改編などは行わず、三時間以内にまとめて上演した。一連の作業を通して、300年前の華麗な舞台がよみがえった。「伝統を尊重する」以外に、新機軸も打ち出された。顔ぶれが一新された若手俳優と一つ一つ手で刺繍された衣装に、現代の舞台装置と技術を加えて、古い芸術を若返らせた。（若手俳優の）青春と華麗さと現代技術は、昆劇の古い情趣を覆ったどころか、この古い芸術を若返らせ、輝かせた。

特に強調したいことは、『1699・桃花扇』の監督が中国国家現代劇院の優秀な若い監督の田沁鑫で、文学顧問が台湾文学学者余光中、そして舞台顧問が韓国の「国師」レベルの監督の孫銓策であったということである。日本の有名な作曲家である長岡成貢が音楽創作を担当し、アメリカで活躍していた蕭麗河が舞台美術と照明を担当した。彼らは皆「昆劇を創る」ために集まってきたのである。全人類の文化遺産である昆劇は多くの国の芸術的栄養により栄えている。

二．いくつかの基本的な概念の検討

１．「伝承文化」概念

本研究課題によると、「伝承文化」とは文化の中の一種である。このことばの構造は修飾連語である。これは従来の中国の学界及び一般大衆の認識とは異なる。中国では「伝承文化」は「動詞-目的語構造」であり、文化を伝承するという意味である。

日本の学者たちとの検討及び日本の京都、沖縄、新潟の実例により、本課題に提起された「伝承文化」には次の四つのポイントがあると筆者は考えている。 ①代々伝えられる、②集団から集団へと伝承する、③ある文化雰囲気に基づいている、④相応のグループにおいて凝集力と同一性が強まる。

前述したポイントが揃った文化現象としては、ユネスコの「非物質文化遺産」の範疇に明らかに該当する。「非物質文化遺産保護公約』に書かれた非物質文化遺産の五つの分類のうち、「伝承文化」は三番目の「社会実践、儀式礼儀、祭りと祝典」に最も近い。祭りと祝典の総合性のため、これらの文化現象が多少は他の四つの方面に関わることは当然であるが、ただその核心部分の内容は、儀式礼儀、祭りと祝典に属する。

2005年に中国の国務院官房は「わが国の非物質文化遺産の保護を強めることに関する意見』

を発表した。「非物質文化遺産は各々の民族によって代々伝えられるものであり、大衆の生活と密接した各伝統文化の表現と文化空間である」と明確に書かれたものである。これは主に民俗文化のことを指している。

中国の有名な文化学者である段宝林氏は、次のように民俗を定義した。「民俗は人びとの生活における風俗習慣であり、民衆により創られて、伝われた生活文化である。物質民俗文化、精神民俗文化と社団民俗文化の三つが含まれる。物質民俗文化は例えば、衣・食・住・行・農・林・牧・漁・工・商・技などである。精神民俗文化は例えば、民間信仰・巫術・宗教・禁忌・風水・民間文芸・娯楽などである。社団民俗文化は例えば、家族・社区・社団民俗文化如家族・社区・結婚/葬式・生老病死・交際礼儀・法律軍事などである。祭り民俗は総合性を持ち、上述した三つの方面を含む」と段氏は考える。

『中華民俗大典』はまだ書かれている途中であり、それは国の大型文化プロジェクトとして編纂されている。祭り民俗、物質民俗、社団民俗、礼儀民俗、信仰民族、民間科学技術と衛生民俗、民俗遊戯、文芸民俗という7つの項目に分けられ編成された。本論においては、「伝承文化」が主な研究内容であり、その特徴は上述した「祭り民俗」と「信仰民俗」と一致すると考えられる。

上記の4つの実例のうち、最初の2つが伝承文化の例として考えられる。中国学界の用語で表現すれば、祭り民俗と信仰民族である。特に、淮陽の例は明らかに縁日の特徴を備えている。

2．「技芸（習い事）文化」概念

文字と意味から考えると、「技芸（習い事）文化」は「伝承文化」よりずっと明らかである。「習い」の中核は技能と腕の意味であり、その慣用の表現は技術・技法・技能・技巧などである。「技芸文化」は技術と芸術における文化と考えられる。「事」の中核は技能と技術である。一方、特に「芸術」のことを指す。『現代中国語辞典』によると、「芸術」は「姿とイメージで現実を反映する。ただし、現実より典型性を持つ社会意識形態である。文学、絵画、彫刻、建築、音楽、舞踊、戯劇、映画、演芸など。」「技芸文化」は通常、技術と芸術における文化と理解していいだろう。

ユネスコの定義した非物質文化遺産の5つの項目において「技芸文化」は、1番目の「口承伝統と表現形式」、2番目の「パフォーマンス芸術」及び5番目の「伝統工芸品」に関わっている。3番目の「社会実践、儀式礼儀、祭りと祝典」と4番目の「自然と宇宙にかかわる知識と実践」におけるある活動も「技芸文化」の範疇に属しうる。前者は例えば、飲食文化の料理の作り方、衣服文化の製作技法、重大な礼儀あるいは祭りと祝典における式次第などである。後者は例えば、民間信仰の風水、巫術、占いなどに用いる礼儀及び道具の作製などである。

中国学界で「技芸文化」を議論するとき、「民間文化」という用語がよく使われる。中国では、「民間文化」と「民俗文化」の実質は同じでありながら、注目の立場がやや異なるだけであると考える。前者は文人文化、上層文化、上品文化およびある人たちの言ったエリート文化などに相当し、そのような文化は、民間により創られたことを強調する。後者はその文化の内容自体および「俗」という特徴を強調する。

民間文化の概念については、まず民間物質文化、民間精神文化と民間組織制度文化という三つに分けた。そのうち、民間精神文化は民間文芸および民間信仰、巫術、宗教、禁忌、風水、娯楽などを含む。民間文芸は民間文学（言語芸術）、民間音楽（聴覚芸術、時間芸術）、民間舞踊（視覚芸術、時空芸術、演技芸術）、民間戯劇、演芸（総合芸術、時空芸術）という５つの分類を含む。「技芸文化」は主に民間文芸の5つの項目に分布している。それと同時に、「技芸文化」は他の領域（例えば、上述した民間精神文化、民間物質文化と民間組織制度文化のある領域など）にも触れている。いずれにしても、民間文芸の5つの分類を理解したうえで、「技芸文化」の主体を捉えうる。

上記の4つの実例のうち、3,4つ目を技芸文化の例として考える。中国学界の用語で表現すれば、民間文芸に属する民間美術類と民間戯劇、曲芸類である。もう一つ指摘したいことは、中国の昆劇を上品な文化とみなす人もいることである。非物質文化遺産の保護対象は民間文化でありながら、上品文化を排除することはない。そして、民間文化と上品文化の間に厳格な境界線は存在しない。昆劇を例に挙げてみると、昆劇は民間から生まれ、民間で盛んになったので、それを保護し、復興するときには、もちろん民間から離れてはいけない。特に後に伝承に注目し論述するときには、民間という大筋をはずさないことが重要である。昆劇の伝承をめぐる問題は典型的な例に挙げられるので、筆者はそれを事例にして、挙げてみる。

３．「（文化）伝承」という概念

中国語では、「伝」の中核は「一方から一方へ渡す、すなわち上の世代から次の世代へ伝える」という意味であり、慣用表現としては伝授、伝播、伝代、伝承などがある。「承」の核心的な内容にはいくつかあり、例えば、担当、継続と受け取りが挙げられる。慣用的表現は伝承などである。「伝承」ということばを理解する際に、「伝」の担い手は上の世代で、「承」の担い手は次の世代である、と筆者は捉えている。伝授と習得を通して、共同してある思想や行為、方法や技法を継続していく。『現代漢語辞典』には、「伝承」の解釈として「伝授と継承」書かれてあり、一方「承伝」の解釈は「継承し伝播させていく」と書いてある。言葉の構造およ社会生活を反映しているという意味で、「伝承」が「教学」と同じようにすばらしいと考える。

中国では、「伝承」という言葉を最初に、そしてより頻繁的に用いたのは民俗学であった。伝承は民俗文化の基本的な特徴であることは学界で普遍な認識である。実は、民俗文化だけでなく、伝統的な文化および伝統文化と関わるさまざまな領域（人類学、民族学、社会学、歴史学、考古学、文化学など）には、「伝承」という重要な概念は用いられている。

学者の趙世林氏は著書『雲南少数民族文化伝承綱要』に、「文化伝承」について下記のように定義した。

> 文化伝承とは、民族共同体の社会成員が文化をリレーしていくような活動を行う過程のことである。この過程は、生存環境と文化背景の制約により強制性とパターン化への要求を備えたものである。そして最終的に文化伝承というメカニズムができ、歴史の発展の中で、民族文化に安定性や完全性、延長性などの特徴をもたらした。つまり文化伝承とは、文化が民族

性の基本的なメカニズムを備え、同時に民族共同体に内在する動機も文化によって維持されるというわけである。社会成員は、共通の民族文化を習得し、伝承することで、安定した人間共同体を構成する。

この定義が「文化伝承」の本質、特性およ意義を適切に解明していると筆者は考える。「民族」という定義を国や地域、エスニックな集団や家族などより広範な範囲まで広げれば、より多くの場合に適用できるようになる。前記の各々の「文化圏」が客観的な存在であるために、どちらも文化の伝承問題を論じる必要が生じてくるのである。

４．生涯学習に関わる概念

中国の「現代中国語辞典」に載った「終身教育」の意味は、「人の一生にわたって受ける教育。就学前教育・就学期間におけるすべての学校教育、大学卒業後の継続教育および各種の成人教育」である。「終身教育」の定義と比べて、「終身学習」の定義はさらに広く、前述した各専門教育機関の実施した教育を受ける以外に、いつでもどこでも学ぶこと、環境学習、長期間にわたって蓄積したこと、非正規のさまざまな学習も含む。中国のことわざから見ると、「死ぬまで生き、死ぬまで学ぶ」、「三人で歩めば,その中に師とすべき人が必ずいる」、「師匠は入門までを、修行は各個人で」のように、人が生涯をわたってどのような形であろうと、学ぶことを強調するものである。

文化伝承という課題を議論する際、「生涯学習」の定義は最も広いと筆者は考える。生涯学習は各種類の教育だけでなく、それ以外の形のない学習も含んでいる。もちろん、各生涯学習の教育機関にとって背負う教育任務の中心を認識することは必要である。

三、理論と実践についての認識

１、伝承・技芸文化の基本的な性質

基本的な性質というと、さまざまな点を挙げられるが、筆者は要点を取り上げ、「三生性」としてまとめた。つまり「生命性」、「生活性」、「生態性」である。

生命性。伝承文化と技芸文化には、各々の魂と形態、変遷がある。魂を生んで、伝承するその民族（集団/グループ）は自身が努力し、作り出す長い間にできた特有な民族精神と民族心理である。共同信仰とその核心の価値観を従うことを通して現れる。[11]この形態は、特定の時空において伝承を担う主体が活動できる形態である。その発展は、伝承の主体さえあれば、自然、社会とずっと影響し合うことができる。そして、伝承文化・技芸文化は常に生まれつつあり、変容し、新しいことが現れる。つまり、永遠に止まらず変化しつつあるということが運命づけられている。伝承・技芸文化の生命を存続させていくためには、両文化に内在する伝承というメカニズムが重要である。

生活性。伝承文化と技芸文化はどちらも日常生活から生まれ、日常生活に溶け込んでいる。伝承の担い手にとっては、伝承文化は外部からやってきた他者ではなく、自分の生活の一部分

である。人々は互いに（伝承文化を）よく知っており、慣れ親しんでいる。情緒的な深い絆のため、切り離されることはもはやできない。

生態性。伝承文化と技芸文化では、各々の独自な環境の中で、変化と伝承が生まれてくる。自然界における生物と環境の関係のように、それらの文化は各々の環境と緊密に繋がっており、利害が一致している。伝承・技芸文化の環境において、最も重要な特質は庶民性である。「庶民環境」こそが、庶民という特徴を有するた伝承文化と技芸文化を生んで、発展させたのである。それゆえ、国内外の多くの学者たちは、伝承・技芸文化を含む非物質文化遺産を「民間知識」や「民間知恵」とも呼んでいる。

２、伝承・技芸文化の伝承ルートとタイプ

中国では、この問題は非物質文化遺産の議論の一部となっている。

呂屏氏などの学者は、従来中国の学者たちの非物質文化遺産の伝承ルートに関わって行なった研究を総括した。その中で、取りあげられた伝承方法は、古代の書籍の保存と伝播、祭り行事、宗教信仰行事、家庭教育、宗族制度などである。また「象徴の符号」（ロラン・バルト）が最も基本的な伝播手段・道具として機能しているという見解もある。ある専門家は、文化伝承が単なる過程ではないため、その全体性を研究する必要があると指摘した。例えば、趙世林は、民族文化の伝承の社会メカニズムを６つにまとめた。家庭を中心とする親族の強制によるもの、村を中心とする社会的な督促によるもの、特殊状態（例えば、戦争）において生ずる高度の伝承によるもの、民族間で自我意識を強化するためのもの、義務の引き継ぎを意味する祖先崇拝および宗教意識によるもの、の６つである。[12)]

中国非物質文化遺産専門家委員会の劉錫誠氏によると、中国の非物質文化遺産はグループ伝承、家庭（一族）伝承、社会伝承、神授伝承の4つのタイプに分類される。[13)]

グループ伝承の核心は、現在よく話題になる「集団的記憶」、「民間記憶」である。集団的伝承は同一の文化圏において、多数のメンバーが共同参加し、同一の非物質文化遺産を伝承する活動である。それらの活動は、成員が共通して有する文化心理と宗教に基づいて行われ、さらにこの活動を通してそれらは強化される。集団的伝承には民間の風俗礼儀（例：祖先崇拝）や季節の節句（例：春節）、大型民族活動（例：寺院参拝）などが多く見られる。

前掲の四つの実例のうち、最初の二つは明らかに集団的伝承に含まれるものである。実際、集団的伝承は、本研究課題で検討されている伝承文化の特徴の一つである。

家族（一族）伝承は、親族同士の間で行われる。基本的に親族内で伝承され、時には、女性には伝承されず、男性だけに伝承される場合がある。技術性の高い業界には、このような伝承がよく見られる。例えば、工芸業や中国医学などである。このような伝承は、中国の長い歴史の中で、家族（一族）を社会細胞とする社会構成の特徴を反映するものであった。その伝承に保守性と密封性があることから、家族（一族）の背負った文化では、伝承の担い手がいないために伝承が途切れり消滅したりすることが非常によく起こりうる。

社会伝承は、師弟制度と独学の二種類に分けられる。独学は、「師がいなくても習得できる（无师自通）」とよく言われるが、筆者は。師事しようがしまいが学ぶ対象があれば、学びは成

立するということを強調したい。それゆえに、その表現には「独学で成功した（自学成才）」のほうがよりふさわしい。熟練した後継者の手ぢ伝承されていくという点は、師弟制度と独学の両方に共通する点である。

4つの実例のうち、朱仙鎮年画の伝承は、家族（一族）伝承の要素も、社会伝承の要素も合わせ持つ。昆劇の場合は、従来の社会伝承（師弟制度）と家族（一族）伝承のほかに、学校での育成という伝承方式が加えられた。学校での育成は、中国では、一部の戯劇、演芸に存在している。

神授伝承は、中国の史詩伝承学の説において一定の地位を占める。例えば、チベット族の史詩『グサイル』を歌う大家のうち、多くが自分の歌う芸術について、神から授けられたものであるか、神が夢枕に立ったことによって身に付いたものだと公言した。しかし、学界では意見が一致してはいない。それが本当に存在するのかどうか、まだ証明できない。神授伝承は、本研究とは基本的に関係ないものである。

3、中国の伝承・技芸文化の伝承に関するいくつかの検討

まず第一に言えるのは、今日の中国では、思考様式の再認識が最も重要な任務だということである。

隠す必要がないので述べるが、「文革」（「文化大革命」）に頂点を極めた「左傾」思潮とそこでの伝統文化の無視は、深刻な影響をもたらした。前述した4つの事例にみられる各々の具体的な実情以外にも、同じような類の実例はまだたくさんある。音楽家の「クマの阿炳」[14]については、二胡の曲が『二泉映月』などの6曲のみ残っている。それ以外の200曲余りの曲は失われ、補っても補いきれないような芸術の損失になってしまった。560年間、伝承されてきた北京智化寺の「京音楽」の楽器（明の時代の楽器）が文革にすっかり焼き払われてしまった。地方劇が盛んな山西省では、数多くの劇が伝承されなくなってしまった。寧波にある梁祝廟及び梁祝の墓の所在地である高橋鎮には、梁祝伝説を完全に語ることができる若い人はほとんどいない。昔から広く伝えられてきたこのような有名な文化作品の絶滅が、危惧されている。多くの伝承文化は、人びとの生活からだんだん離れていき、多くの技芸文化の後継者が失われている。一方、我々は、歴史の錯誤を認識し、反省することを通して、社会発展において文化が重要な地位を占めていることを、すでに再認識している。「文化遺産の日」の設置、一連の公文書と法律、企画の立案、国と各地方の非物質文化遺産リストの整備、一連の保護・発展措置の推進およびいくつかの大きな文化プロジェクトの創出、そして学術研究の進歩を通して、中国は伝統文化において、新たな一ページを開いてきた。

現在、国際・国内情勢においてまた新たな問題が生じてきた。つまり、勢力ある文化とみなされる西洋文化が、経済的グローバル化にともなって中国に強い影響を与えている。さらに、中国国内での急激な現代化と都市化が伝承文化や技芸文化に与える影響も、ますます強くなっている。この大きな２つの力が共同作用した結果を、中国の農村を例として見てみよう。農村の生産・生活様式が大きく変化したため、多くの農村の若者が都市で働き、伝統的な農業生産から離れてしまう。テレビやインターネットなどの普及や文化娯楽の多様化のため、伝承文化

や技芸文化の居場所が、片隅に追いやられてしまう。根本的原因は、社会の発展が伝承文化や技芸文化の拠り所である生存環境に著しい変化をもたらしたことにある。このような影響は、水と魚の関係のように、人びとの思考様式の変容を導く。それゆえにこそ、思考様式の再認識が必要とされるのである。

引き続き、言えることは、思考様式の再認識は、二つのポイントで構成されているということである。一つは文化的多様性を守り通すこと、もう一つは変化し続ける社会への適応性を強化することである。前者は目的であり、後者は手段であると言い換えてもいい。

ここでは、適応性に注目して、検討したい。それは、この数年において、中国では文化多様性を守り通すことと文化遺産を保護することに関わる議論が多くなされる一方で、人びとのそのような適応性を高めることについてはわりに議論が少なかったというわけである。

適応性の基礎理論を論じる際に、提起された文化現象とは、生命があり、変化していく生き物と認めなければならない。この認識から、ある文化現象の生命力を維持し、伸長すること、つまり文化現象の生命力と持続発展の能力の向上（「動態保護」という）は、文化現象を保護する上での実質的な目標である。その形態を固定化し、あるいはある時期の状態のままで静止することを目指すだけの保護（静態保護）ではないのである。

環境の変化は逆転できないために、文化は環境への適応性を高めなければ、環境に根ざすことも存続することもできない。また、その適応性の中心は、新機軸を打ち出すことである。それは。伝承文化・技芸文化の両方が従うべき原則と言える。成功した例は多い。前述した昆劇の例には、多くの改革があるからこそ、古い劇に新しい時代の雰囲気を付加し、観客にその存在を認めさせた。それは「尊故融新」（古いものを尊重して新しいものと融合させて取り入れることの意）と、ある学者は述べている。[15)]

前述した上蘇村の拝燈山の事例では、伝統の晋劇が演じられる以外に、若い人の好きなポップスやダンスもよく演じられる。中国では、春節のような最も重要な伝統祝日においても、人々の習慣や時代の変化につれて、新しい要素が生まれてきた。CCTV（中国国営放送局）の春節聯歓晩会はもはや、もう一つの「おせち料理」（定番の番組）となっている。今後、筆者は中国の伝統文化における「文化祭」に注目したい。伝統と現代の結びつきが、その主要な特徴である。各種の技芸文化の伝承において、その題材や手法、役割などを新しい時代の需要に適応させていけるならば、、それらは発展し続けることができる。さもなければ、消滅してしまう恐れがある。

適応性を高める問題については、あと2つのポイントに言及しなければならない。一つ目は、文化自体の遺伝子系統の破壊を防ぐこと。二つ目は、「静態保護」も大事にすべきであること。特にある文化の現状が、その環境への適応性をもはや高めることができない場合には、静態保護が唯一の保護手段になるのである。

最後に述べたいの、伝承・技芸文化の伝承における、教育の役割重要性についてである。教育が力を発揮できる一つ目の機能は、全社会、とりわけ若者が、文化遺産を保護する重要性を認識すること、また世論をそのように導く力を高めることである。二つ目の機能は、多様なルート（例えば、学生の部活動、コミュニティの文化活動、老人大学や旅行など）を通して、様々

な形で技芸文化の内容が人びとに伝えられる。三つ目の機能は、専門的教育を通して人材を育成することである。四つ目の機能は、フィールドワークや調査研究を通して、地域の伝承文化や技芸文化を掘り起こすことができることである。これらの内容については、稿を改めて検討したい。

注と訳注

1）舒乙、「淮陽不可忘」、『人民政協報』, 2009年12月14日
2）侯秀麗、「原生態是民俗的生命，民衆是民俗的霊魂---09元宵節蔚県民俗活動考察記」、『古村落』、2010年第二期
3）農村などで燈をともして火の神に供える行事である。（訳注）
4）年画（ねんが）とは、中国の民間絵画であり、正月に民家内部や門口に飾られるものである。民衆の、憧憬や理想あるいは願望など、その生活に密着した感情や感覚を具象化したものである。ただ、その庶民性が定着するのは明代になってからである。（訳注）
5）明・清代には河南省の朱仙鎮、江西省の景徳鎮、広東省の仏山鎮、湖北省の漢口鎮が「四大名鎮」と呼ばれる。（訳注）
6）東京（とうけい）は、北宋の都だった開封のことである（現河南省東部開封市）。（訳注）
7）岳飛（がくひ、1103年－1141年）は、中国南宋の武将。南宋を攻撃する金に対して幾度となく勝利を収めた。宋史では1140年に岳飛は朱仙鎮にまで至り金軍の総帥斡啜と大会戦を行ないこれを破ったと記されている。（訳注）
8）陳勤建、「尋找我們民族的精神家園――当代中国的非物質文化遺産保護」、学苑出版社、『非物質文化遺産学論集』
9）劉康達、「尊故融新話伝承――兼議昆曲『1699・桃花扇』的成功経験」、民族出版社、『非物質文化遺産縦横談――北京市非物質文化遺産保護工作高級研討班論文集』
10) 万暦（ばんれき）は中国、明代の元号（1573年－1620年7月）。万暦末年は1618年～1620年のことである。（訳注）
11) 賀学君、「関于非物質文化遺産的几点理論思考」、学苑出版社、『非物質文化遺産学論集』
12) 趙世林、「云南少数民族文化伝承論綱」、云南民族出版社
13) 劉錫誠、「伝承与伝承人」、民族出版社、『非物質文化遺産縦横談――北京市非物質文化遺産保護工作高級研討班論文集』
14) 阿炳は中国近代有名な音楽家である。目が見えないので、「クマの阿炳」と大衆に呼ばれている。（訳注）
15) 劉康達、「尊故融新話伝承――兼議昆曲「1699・桃花扇」的成功経験」、民族出版社、『非物質文化遺産縦横談――北京市非物質文化遺産保護工作高級研討班論文集』